

「一ノ宮、聖蹟桜ヶ丘を中心として」

山崎和巳・諸富文香
(多摩市教育委員会・学芸員)

【コース】 聖蹟桜ヶ丘駅集合～一の宮周辺～バス停(宝蔵橋か東寺方)解散

【探訪距離】 約4km

【テーマ】 一の宮周辺を知る

【キーワード】 地域を語る文化財・武蔵国一之宮小野神社・杉本(一ノ宮)万平

【聖蹟桜ヶ丘駅】 ⇒ ①一ノ鳥居・鳥居戸・神奈川県水量標識・一ノ宮の渡し・ケヤ

キ ⇒ ②武蔵国一之宮小野神社・(木造隨身倚像【都指定】) ⇒ ③落川・一の宮遺

跡 ⇒ ④真明寺・杉本(一ノ宮)万平墓 ⇒ ⑤宝泉院・万平地蔵 ⇒ [バス停(宝

蔵橋か東寺方]

メモ

一ノ宮の町名の由来

「一ノ宮」の町名は、地内にある「小野神社」が、武蔵国六所宮（府中市内大国魂神社）の東殿第一位の座にまつられ、一之宮大明神と呼ばれたことに由来しています。

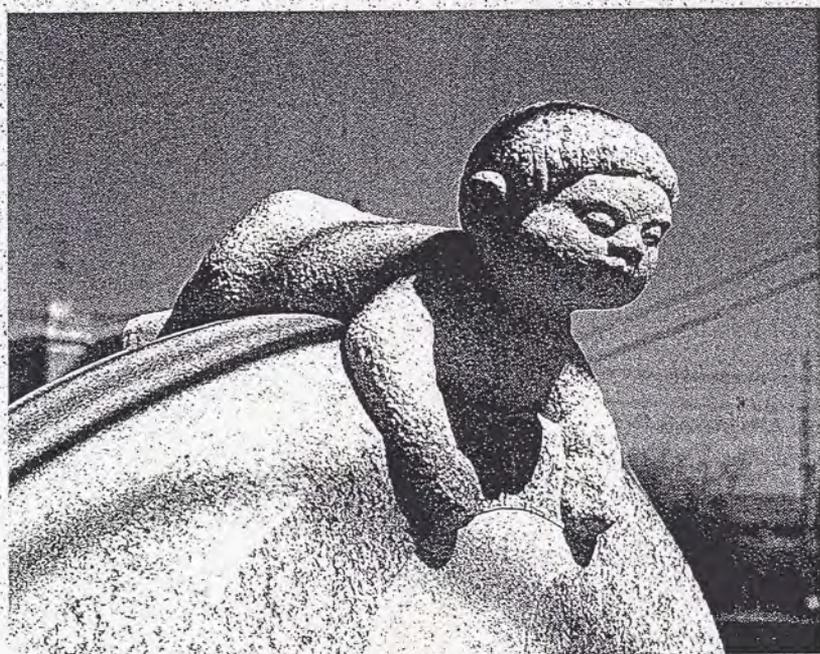
小野神社については、安寧天皇（紀元前6世紀）の勅命により創設されたといわれています。また、「延喜式神名帳」には多磨郡八座の一つに小野神社が記されており、市内で最も古く由緒ある神社です。「日本三代実録」によると、元慶8年（884年）正五位の神位が授けられました。「吾妻鏡」には一宮と地名の記載があります。

一ノ宮の神輿は、中世以来大国魂神社の祭礼「くらやみ祭り」に参加しており、道路事情が悪化する昭和30年代前半まで続いていました。

モニュメントのデザインについて

一ノ宮町名由来板のモニュメントは、一ノ宮の由来にちなみ、「祭り」をテーマとして、彫刻家の伊佐周氏により制作されたものです。

作品は、市民生活に密着した地域文化としての「祭り」の継承と、祭りばやしの笛や太鼓のひびきに心をはずませた幼児体験への郷愁を重ねて表現しています。



作者 伊佐 周
設置 平成11年3月
場所 宮下通り沿い
(多摩市一ノ宮2-5-10地先)

多摩川水量標識の由来

この水量標識は、明治25年4月に神奈川県が設置したもので、その当時、多摩市が三多摩の各市とともに百年前は神奈川県に属していたことがわかる資料の一つとして貴重なものです。

年月の流れの中で風化され、判読に不明な部分がありますが、次のように刻まれています。

「水量標零点ヨリ」

「拾尺[]」

「明治廿五年四月」

「神奈川県」

また、「水量標零点ヨリ」と刻まれている部分の前にも、さらに一行何らかの文字等が刻まれていたものと思われます。

当時、氾濫を繰り返していた多摩川の水位を測る目安としていたのではないかと考えられます。

この水量標識がある場所は、当初設置された位置ではなく、多少移動しています。

鳥居戸

この付近は昔、「鳥居戸」あるいは「鳥居道」という地名があったといわれ、その名のとおり、ここにある二本の大きなケヤキは小野神社の御神木で、以前はこの付近に「一の鳥居」があったと伝えられています。

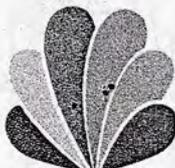
また、このあたりから北の方向に「一ノ宮渡し」があったといわれています。

聖蹟桜ヶ丘まつり (平成5年10月23日、24日)

明治26年に三多摩地域が神奈川県から東京都に(当時東京府)に移管されてから今年で百年になるのを記念し、TAMAらいふ21事業として、三多摩各地で様々な催し物が行われました。

多摩市でもこの一環として、平成5年10月23日、24日の両日に「聖蹟桜ヶ丘まつり」を開催しました。

今回、「聖蹟桜ヶ丘まつり」の一つの事業として、また、多摩市の百年の移り変わりを見つめてきた多摩川水量標識が、さらに今後の百年を見守ってゆく「タイムカプセル」として、周辺にお住まいの皆様や、ここを訪れる人々に親しんでいただくようにこの由来板を設置しました。



TAMAらいふ21

3

一宮大明神社 百草八幡宮より十五六町北の方、多摩川の南岸一宮村にあり。(六所宮よりは西南一里あまりを隔つ。) 祠官新田氏・大田氏両家より奉祀す。祭神は天下春命なり。後、瀬織津比咩及び稻倉魂大神を合祭して三神一社三扉とす。(祭神今は小野神社に同じ。) 『旧事本紀』に饒速日命(地神二代天忍穗耳尊の子なり)この葦原の中津国に降臨し給ふ時、輔佐として随駕し給へる三十二神のその一神にして、即ち三十二国に分け降り給ふ。その時信濃国へは天表春命、武蔵国へは天下春命降臨なし給ひ国を開き給ふと見えたり。

社司相伝ふ、神代の昔当社下春命この地に止り給ひし歟、或は又國の祖の神なれば、後に國つ神たちこれを祀り給ひし歟、今しるべきにあらず。社伝に一宮下春命、小野宮村小野神社へ遷座ありて、倉稲魂命を配祀なし小野神社三神となせしは、その時世詳ならず。然るに成務天皇の御宇、国造兄多毛比命、武蔵国多麻の地に府を開き給ひし後、一宮は開國の祖神、小野宮は同郷の旧社なれば、国造崇敬ありて倉稲魂命と共に合せて、再び六所の宮の相殿に遷しまめらせ、これを祀るに國社の礼を備けられしとなり。又毎歳五月五日六所宮大祭の辰、当社の祠官府中に至り、一宮小野三所の神輿を供奉しまめらせ、御旅所において捧ぐる所の神幣を持ち、神輿帛社の折も又供奉して六所宮に至り、神事終るの後、件の神幣を守護して直ちに一宮に帰り、当社の内殿に収め、祭盛を供し祭奠をなすを旧例とするは、元つ社なればなりといへり。按ずるに、当社一宮の事旧史に所見なしといへども、既に地名を一宮と号し、祠をも一宮と称したるは、開國の祖神第一に鎮座なし給ふが故に、かく一宮とは称したりしとおぼしく、旧祠なる事疑ふべくもあらざるべし。依つて考ふるに、『東鑑』治承五年四月二十日、小山田三郎重成、平太弘貞が所領を自らの所領に注し加ふると云ふ条下には、多摩郡の内吉富ならびに一宮蓮光寺等の地名を載せ、百草村松蓮寺所蔵の建久四年の経筒には、一宮別当松蓮寺と銘せり。しかる時は建久のむかし松蓮寺当社の別当たりし歟。又高幡村金剛寺に存する所の、文永十年の鰐口の銘にも、一宮田人鍋師源恒有とありて、一宮の地名往々見あたり。

一 小野神社と称す。南多摩郡多摩町一宮(一ノ宮と称したの六所宮(大國魂神社)の一の宮であるから『延喜式』の小野神社は当社であるともいふ。なおもとは多摩川の流に近所にあつたのを、山寄りに移したものと伝えるが、もともとは多摩川の流が愛するたに郡境も動揺したもので、あるいは府中にある小野神社とも同一社であつたものが、氾濫などの理由により二箇所に分かれた一方を旧址と呼ぶようになったものかとも考えられる。

二 『先代旧事本紀』旧事紀ともいふ。平安初期編纂といわれる。著者不詳。

一 『和名抄』の多摩郡小野野に於ては、多摩川左岸の地とする説と右岸の地とする説とがある。前説は府中に小野神社が存する事実を根拠とする。後者は『大日本地名辞書』などの説で、関戸の南に小野路という地名があること、関戸の西に一宮小野神社があり、式内の古社とも考えられる点から、小野野を河北(多摩川の左岸)に求めるべきではないとするもので、七代の一たる横山党の祖が小野を家号とした事実にも注意している。

一本覆 一宮より南の方、半町ばかりを隔て、耕田の中にあり。樹の本に注連を繞らせり。土人、百草八幡宮の一の鳥居の旧跡なりと云ふ。(この所より百草の八幡宮へはその間凡そ十町ばかりあり。)



一宮大明神社

新編 江戸名所図会 中巻 (全三巻)

昭和50年1月10日 初版発行

三宅 義光 郎
 角川 源 四
 木倉 川内 田
 角川 中 宮
 角川 源 四
 角川 中 宮

東京都千代田区富士土2ノ1372
 株式会社 角川書店
 〒102 電話(03)265-7111(六代店)

九尺に二間の覆屋あり、前に鳥居を立、八幡社これに同所
例祭々々九月十七日、村内の鎮守なり、 寮門を入て左にあり、
より東にあり、社も大抵山神に同 寮門を入て左にあり、
例祭々々八月十五日に執行ふ、 寮門を入て左にあり、

〇一之宮村 一之宮村は、郡の辰巳にあり、徳富郷土淵
庄に屬す、村の四境、東は玉川を境として、中河原村に對
し、西は百草村に接し、南は原・關戸・寺方の三村に隣
り、北は落川・四ツ谷の二村に續けり、東西凡三十町、
南北も大抵同じ、村内すべて平衍にして、田多く、畑少
し、土性は眞土なり、檢地は文祿三年太田宮内之丞・井上
善藏等二人なりと云、其後寛永十四年九月廿二日尾崎庄
兵衛・鈴木忠右衛門等糾せり、このふたゝび奉行せし人あ
りしなるべけれども、傳を失ひしならん、當村古のことは
すべて失したれど、一宮明神の立る地にて、村名も一
之宮と唱ふるときは、古く開けたる地なるべし、猶一宮
の條下と照し見るべし、〔東鑑〕治承五年四月廿日の條
に、武藏國多磨郡内吉富井一宮蓮光寺等をもて、小山田
三郎重成が所領の内に注加すとあれば、この頃は村落を
なせしことしらる、其後のことは傳はらず、遙の後文祿
年中の水帳には、中山助六郎・桑島萬機等が、知行せし
由を記せり、この二人は皆八王子の北條陸奥守が家人な
れば、舊領の地をそのまままひしにやあらん、寛永十

水利 用水村の北の方、落川村の方より引來りて、村内所

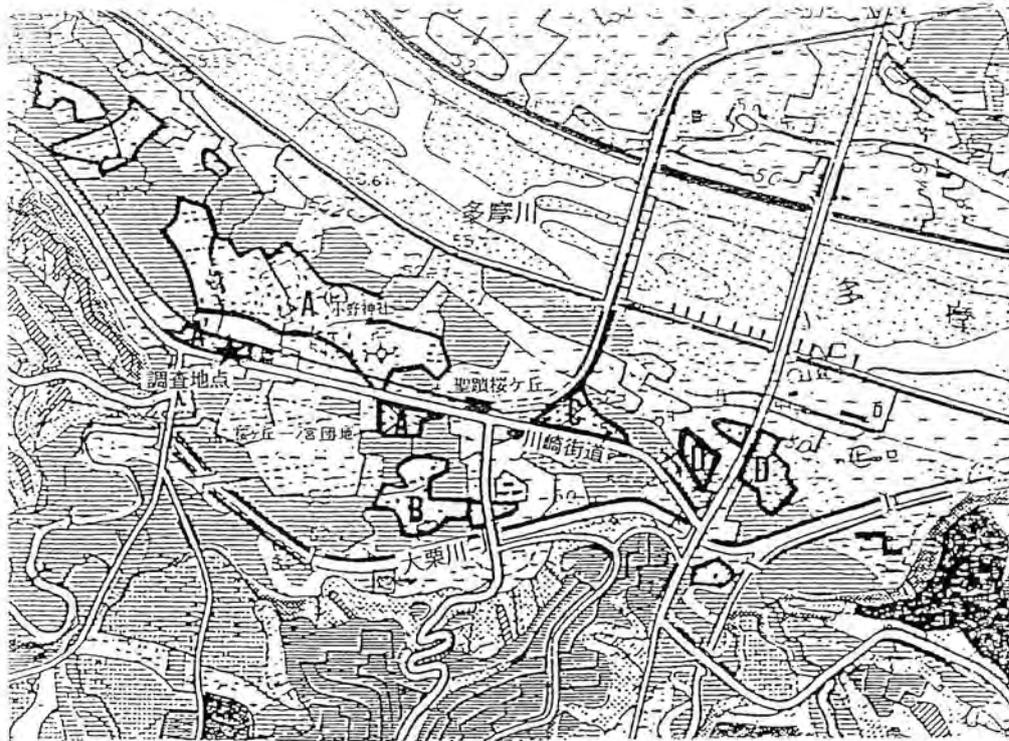
神社 一ノ宮明神社社地、五十間四方許、社領十五石の内な
はり、村内にて十五石の社領を御朱印附せらる、本社は三間
に二間の宮造にして、四邊に瑞籬を構へ、其前少しへ立て拜
殿を建つ、二間に五間半、共に西向なり、又拜殿をさること
八九間許、西に隨身門あり、二間に三間半、隨身の像は佛師
運慶が作なりと云、前に木の鳥居たり、郡中に一宮・二宮
ありて、村名にさへ唱ふれば、此社の古きことと論をまた
ず、今に其社地をみるに、もと玉川の河原にして、四五百年
來の開闢に過ぎざるべく見ゆれば、是へ移し祀りしは後世の
こととこそおもはる、近郷百草村は山にそひたる地にして、
かしこなる寺院松連寺に藏する、建久四年の銘を刻せし經筒
を見に、一宮別當松連寺とせり、さればその時代には、
松連寺當社の別當職たりしこと分明なり、よりておもふに、
そのかみの社地は今の地よりは西へよりて、岡山の嶺上などに
たらしなるべし、社傳に云、當社は安寧天皇の御宇鎮座に
て、祭神は當國の國造惠多毛比命の祖、天下春命なり、配祀五
座伊弉册尊・大己貴尊・素戔嗚尊・瓊杵尊・彥火々出見尊なり
と、今按に是社傳疑はしく覺ゆ、其ないかと云に、今の神
職と云者後世に移りしものにて、古松連寺の別當職たり
しことだに、いひもつたへざるほどなれば、中へる衰廢して、
社傳以下皆亡びしは勿論なり、されば此祭神も後に推考し
て、妄に定しこととはしらる、今試に論ぜんに、古は當國の
地、三國のごとくにわかれて、无邪志といひ、胸刺といひ、知
々夫といひしなり、今より想像するに、山川原野等をさかひ
とせしさま、おのづから昔のことしゆべからざるに似たり、

の名ふるくものにみえしは、〔東鑑〕を始とすべきか、治承五年
四月廿四日の條に、武藏國多磨郡の内吉富井一宮蓮光寺等を
以て、小山田三郎重成が、所 神主新田主水 新田大炊助義
領の内に住加云々とあり、 重が後裔なり
といへり、されど舊記家系は、皆丙丁の災にかゝ、 本地堂
りて尙存すと云り、その詳なることは考へず、 本地堂
隨身門を入て左の方にあり、二間に九尺、文殊菩薩の獅子に
またがりたる長六寸許なる木像を安置す、この本地佛あるに

四年の比は高室四郎左衛門・同喜藏二人の御代官所なり
しと云、これも中山・桑島が知行の外、御料所の方を支
配せしならん、正保年中の田園の簿に高室喜三郎が御代
官所と、中山助六・桑島孫六が知行及び一宮社領・同所
觀音領入會の村なりし由をのす、その後元祿六年會我七
兵衛にも、當村内を分ち賜ひしと云、今もこれ等が子孫
中山勘解由・會我七兵衛・桑島孫六が知行および社領・寺
領入會へり、村内南北に達する一條の往還あり、相傳へ
て古の鎌倉道なりと云、則ち一宮渡へ出る道なり、
高札場 三ヶ所あり、いづれも
村の東へよりてあり、
小名 大畑 東南の方を
外馬場 東の方にあり、按に古き社
頭には必ず調場の地あれ
ば、もしくは一宮の馬
場のことなるにや、 鳥居 戸 鳥居ありし地と見ゆ、昔
市場口村の西の方を云へり、古社前 小峰 西南によ
るること凡三十町、川幅は平水
のときの十五間にあまりり、
山川 多磨川 村の北方四ツ谷・中河原兩村の界を流る、西の方
落合川より來り、東の方關戸村に達す、當村へか
るとき十五間にあまりり、
渡津 渡 當村より中河原村へかよふ、般渡なり、よりて一宮ノ渡
渡と呼べり、毎年十月より明る三月迄は、村民私に芝橋を
渡して往來を便
りすと云、

さて无邪志には兄多毛比命を國造と定められ、胸刺へは伊狭
知直ををかれ、知々夫へは知々夫彦命ををかれたり、この知
々夫彦は下春命を祖として、惠多毛比命は天孫日命の子孫な
れば、もとより同族にあらず、これ〔國造本紀〕〔古事記〕等の古
書によりて云所なり、今社傳に惠多毛比命の祖下春命と云こ
と、昔三國なりしことを考へずして、今三をあはせて、一國
とせし後より、かゝる兩端をかれし説をなせしにて、その牽
強附會しるべし、又按に諸國とも一宮・二宮・三宮など號し
て、國の鎮守たることは常なり、中にも東海・東山の諸國に祀
れるもの多く、大己貴・少彦名の二神なり、その故はこの二
神は草昧の世、早く中國より東邊までを治め玉ひし神なれば
なり、その委きこと〔神代卷〕等に載たれば是には辨ぜず、
これによれば、祀せらる大己貴神、これもとの祭神なりしな
らん、或云、當社は神名帳當國四十四座の内にてせざればさ
せる古社ともおもはれずと、これもまた考の疎なるなり、神名
帳は延喜年中にえらばれしものなれば、今よりは上古のこと
は論なれど、草昧の世に比すれば猶後世とやいはん、古社
にても、其比衰たるは元よりのせざるなれば、式外の神社を國
史等にものせて、古社は何ほどもあるべきなり、古此國三國
にわかれしとき、荒川より南にては、當社一宮にして、北は
足立郡水川社知々夫にては大宮、これ皆國の一宮なるべし、
然るに大寶年中初て國守を置れ、今の府中を定められしとき
當社はおとろへたるなるべけれども、もとより國魂の社なるに
より、府に近ければこれを一宮と號し、その餘の二社は大宮
と號して、唱をわかたれしなるべし、今府中惣社六所の祭に
も、當社の神輿を出すこと、かたがたゆへあるべきことな
り、後世傳を失ひて或は式内小野神社は、別當社なりと云妄
説をなすに至れり、かく古實を失ふこと惜むべし、また一宮
ても、昔別當寺も、 末社小社 二字 本地堂の並
有し事明らかし、

寺院 眞明寺 冠木山蓮華院と號す、新義眞言宗、高幡村金剛寺
石の地を御寄附ありと云り、客殿七間に六間、本尊十
一面觀音木の立身、長三尺五寸ばかりなるを安置す、 十王
堂 客殿の前にあり、
二間に四間、



低地の微高地 (自然堤防) 人口地形 (盛土地) 低地一般面 (氾濫平野)

第20図 落川・一の宮遺跡の地形 (1/20000), (★=調査地点)



平安時代になると、丘陵の開発がさらに進み、「御牧」とよばれる官管の牧場がつけられた。そのうち小野牧は、現在の多摩市・稲城市周辺にあったと推定されている。

牧の制度自体は7世紀末に登場していたが、次第にうまく働かなくなり、新たな制度が求められていた。そこで成立したのが、国が直接管理する「御牧」の制度である。

小野牧はもともと陽成上皇の私的な牧であったが、承平元年(931)、御牧に指定され、京の官人たちが使うための馬を供給するようになった。

牧名	種類	牛・馬	主な推定地	
			旧郡	現在
檜前牧	諸国牧	馬	賀美	埼玉県児玉郡上里町
			那賀	埼玉県児玉郡美里町
			豊島	東京都台東区
神崎牧	諸国牧	牛	豊島	東京都新宿区
石川牧	御牧	馬	部楽	神奈川県横浜市
			多磨	東京都八王子市
小川牧	御牧	馬	多磨	東京都あきる野市
由比牧	御牧	馬	多磨	東京都八王子市
立野牧	御牧	馬	部楽	神奈川県横浜市
			多磨	東京都府中市・立川市
			足立	埼玉県大宮市
小野牧	御牧	馬	多磨	東京都多摩市・稲城市
秩父牧	御牧	馬	秩父	埼玉県秩父郡長瀨町 (石田牧)
			秩父	埼玉県児玉郡神泉村 (阿久原牧)

近藤氏の牧 / 『多摩市史』より



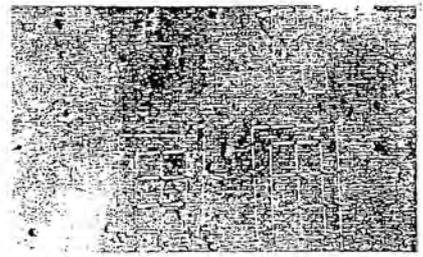
落川・一の宮遺跡は、主に、古墳時代前期から鎌倉時代まで、約1千年間も連続と続いた集落です。すぐ東側には武蔵国一の宮といわれている小野神社があります。また、縄文時代晩期・弥生時代中期の遺構も発見されています。平安時代中頃以降、武士集団が興ってきて屋敷を構えますが、集落は鎌倉幕府の滅亡と共に姿を消します。その後、道路、用水、田畑が幾層にも重なって土地利用され、江戸時代初期に再び集落が形成されました。

▲アドバルーンによる撮影

住居跡をはじめ各種の遺構とともに、土器、石器、金属器、木器などの遺物が豊富に出土しました。特に、武士団の発生を裏づける武具・馬具、四面に縁側のつく大規模な建物が多く発掘されました。東国の古代から中世社会に変換していく様子が、具体的に解明された遺跡です。



▲多摩川右岸沖積地に広がる遺跡



▲掘立柱建物跡群

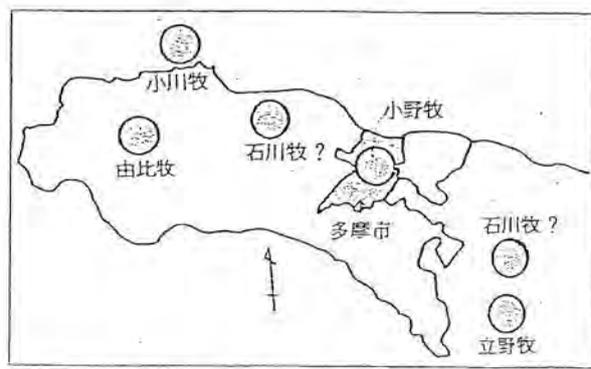


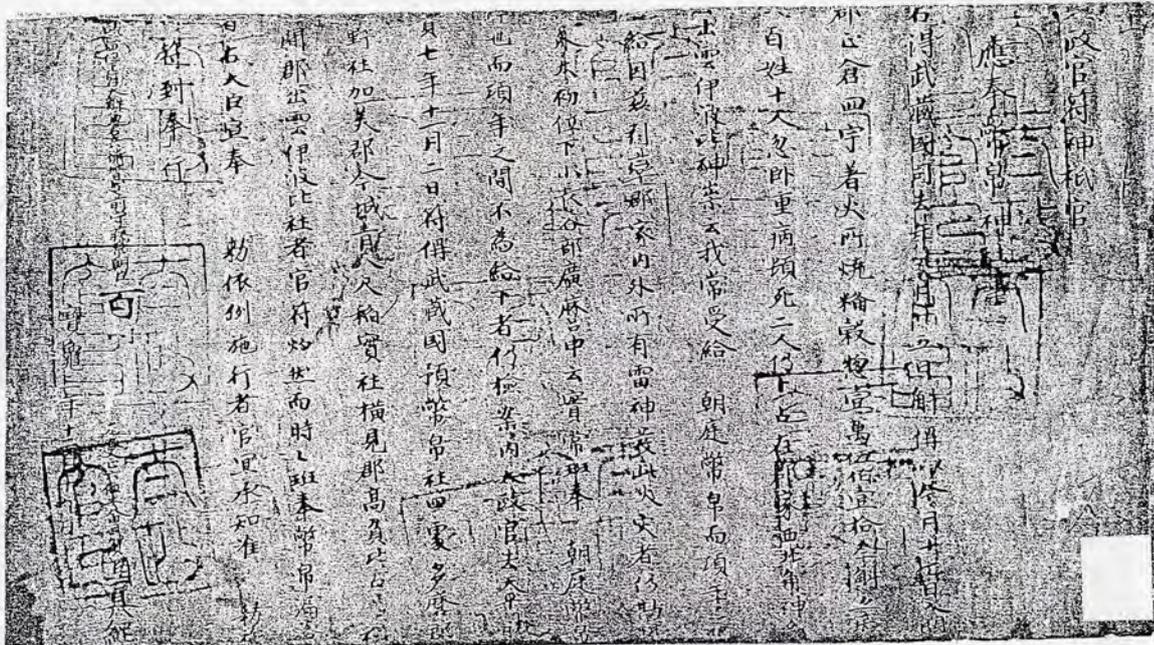
図12: 多摩市周辺の「牧」推定地

奈良時代からあった小野神社

小野神社の創建年代は、社伝に「安寧天皇18年2月初末」とあるものの、はっきりとしたことは分かりません。

「小野神社」の存在が分かるもっとも古い史料は、宝亀3年(772)の太政官符です。この太政官符には、天平勝宝7年(755)年の太政官符が引用されており、そこに「多磨郡□野社」の名が見えています。このことから、少なくとも多磨郡

には、「小野神社」という名前の神社が奈良時代には存在していたことが分かります。その後の元慶8年(884)には「小野神」が神階を上げられた記事が見えます。さらに10世紀前半に成立した『延喜式』神名帳に載せられていることなどから、古くより朝廷や国の保護・管理を受ける神社として存在していたことが分かります。



太政官符 (複製)

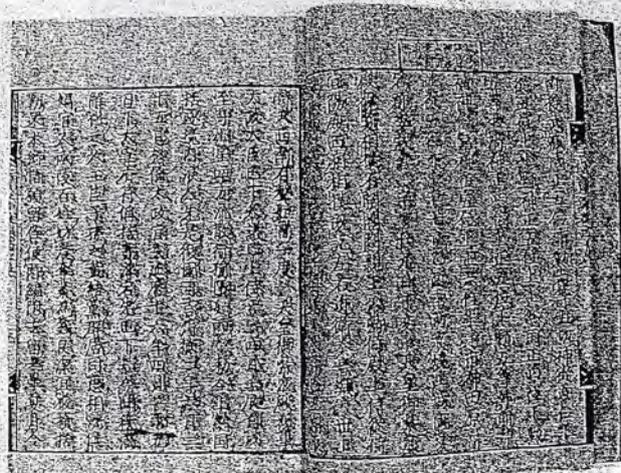
宝亀3年(772) / 多磨市教育委員会蔵・原資料天理大学附属天理図書館蔵

小野神社の初見史料。「太政官符」は、すべての官庁を統括する官庁「太政官」から下される文書。本資料は長年その存在を知られていなかったが、昭和32年(1957)に『弘文荘善本目録』に掲載されたことにより知られることになった。卜部吉田家旧蔵とされる。

入間郡の神火事件が出雲伊波比神の祟りとされたので調べたところ、天平勝宝7年(755)の太政官符に「幣帛に預かる神社」として、出雲伊波比神を含めた4社が示されていた。その筆頭に挙げられているのが「多磨郡□野社」で、これが小野神社であると考えられる。ここから、小野神社が天平勝宝7年には朝廷の幣帛を受ける神社であったことが分かる。

なお、神火事件は当時の政治情勢と密接なかかわりを持ってしているとみられ、本事件でも、宝亀4年に当時の郡司の解任が命令されている。

(大意)
武蔵国司から「入間郡の正倉が火災となり、繭・穀物一〇五—三石が焼失、十人が重病、二人が死亡した。占ってみたところ「入間郡家の西北の角にある出雲伊波比神が、朝廷の幣帛(供え物)を受けるはずであるのに、最近では幣帛がなかったため、崇つて雷神を率いて火災を起こしたのだ」と出た」という報告があった。
調べたところ、天平勝宝七年十一月二日の太政官符に「武蔵国の幣帛に預かる社は、多磨郡の□野社(小野社)、加美郡の今城青八尺稲実社、横見郡の高負比古乃社、入間郡の出雲伊波比社である」と出ているので、出雲伊波比神が幣帛を受ける神社であることは確かである。しかし、時々幣帛が漏れてしまっていたので、神祇官は、幣帛を神社に奉るようになさい。



日本三代実録 府中市郷土の森博物館蔵

六国史のうち六番目の勅撰正史。9世紀後半の清和・陽成・光孝天皇3代の時代を記す。延喜元年(901)年成立。

元慶8年(884)7月15日条に、小野神が「従五位上」から「正五位上」にあがったことが記される。小野神の神階がわかる唯一の史料。この時には、武蔵国駐切神(多磨郡阿伎留神社)も神階が正五位上勲六等から従四位下にあがっている。なお、氷川神の神階は元慶2年12月2日に正四位上、秩父神の神階は12月8日に正四位下となっており、小野神よりも高い。

一宮から六宮と総社・六所宮^{ろくしょくぐう}

一宮とは、国の鎮守として定められた神社で、全国的に11世紀末から12世紀初めに成立しました。背景には、地方支配の変化や、国衙^{こくが}在庁支配機構の成立により、神社が再編成され、国衙の管理下におかれることになったことなどが考えられます。

武蔵国の場合は、『吾妻鏡』治承5年（1181）4月20日条の「一宮」の記載が一宮の初見となります。『神道集』の記載から、武蔵国内には一宮小野神社を筆頭に、二宮小河神社（現・二宮神社）、三宮氷川神社、四宮秩父神社、五宮金鑽^{かなま}神社、六宮杉山神社の六つの神社が編成されたことが分かります。これらの神は、武蔵総社・六所宮（現・大国魂神社）でも祀られており、六所宮の例大祭（くらやみ祭）では、一-

宮から六之宮の神輿が出御します。

一宮から六宮の位置は、武蔵七党など武士団の分布に深くかかわっていると思われます。一宮小野神社は横山党・西党、二宮小河神社は西党、三宮氷川神社は野与党・足立氏、四宮秩父神社は丹党・猪俣党、五宮金鑽神社は児玉党、六宮杉山神社は横山党など、それぞれの武士団の影響下にあったと推測されています。また、たとえば二宮小河神社の地頭職を持つ西党日奉氏が、鎌倉時代に国衙在庁官人であったように、それぞれの武士団は、国衙と深いかかわりを持っていました。こうした国衙と武士団のつながりが、武蔵国内の一宮制にも影響したものと考えられます。

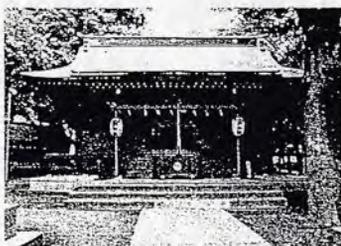


大国魂神社（六所宮） 2004年撮影

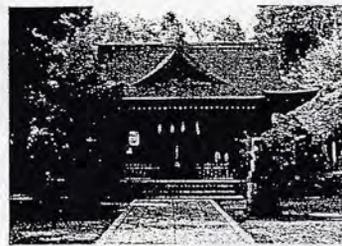
総社とは、国府の近くや国府内に国内の神霊を集めて祀った神社。かつて国司は就任時に国内の神社を巡拝したというが、総社の成立により、まとめて総社で参拝できることになった。

六所宮は、『吾妻鏡』寿永元年（1182）8月11日条に初めて見えるが、成立は11世紀頃と推測される。武蔵国は、相模・上野国などとともに、総社の勢力が比較的強かった地域と考えられる。

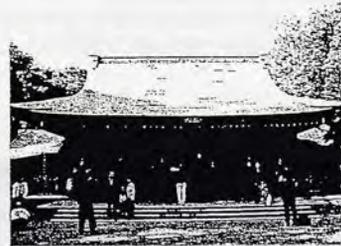
六所宮では、一時、六所に関する正しい伝承が失われていたが、文政年間、猿渡盛章により由来が判明し、国内六社を祀り直した。この六社は中世の六所と同一と思われる。ただし杉山神社には論社が多く存在する。また氷川神社、金鑽神社は、それぞれ一宮・二宮とも名乗る。



小野神社 多摩市
平成16年（2004）撮影



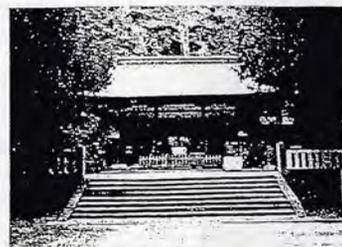
二宮神社 あきる野市
平成16年（2004）撮影



氷川神社 さいたま市
平成16年（2004）撮影



秩父神社 秩父市
平成16年（2004）撮影
山口久夫氏提供



金鑽神社 児玉郡神川村
平成16年（2004）撮影



杉山神社 横浜市緑区西八朔
平成16年（2004）撮影

宮は小野神社を分鎮したもの」と伝えられているとのことである。なお、神社に関連した小名に鳥居戸・外馬場・市場口がある。

一ノ宮の渡し

多摩川には一ノ宮と関戸に渡しがあった。中河原・府中へかよう渡し船である。冬は芝橋を渡し、夏はこの船で往来の便をはかっていた。しかし、明治6年、関戸の渡し船は、関戸から一ノ宮に養子入りした浅右衛門の子某とともに、渡船場の権利も同村に渡った。この権利をめぐる事件が起こった。関戸村は翌7年、新規に渡し場設置の申請を県に出すこととなった。明治8年9月からは2つが並存し、関戸橋が完成（昭和12年）するまで続いていた。渡船場への入り口付近と思われる所に「水量標零点ナリ、明治廿五年四月神奈川県廳」と記された水量標がある。

一ノ宮の神輿

毎年5月5日に行なわれる大国魂神社（府中市）の祭礼は「くらやみ祭り」といわれ、喧嘩神輿でも全国的に有名であった（遠い昔には6社の神輿が一同に会したといわれる）。この祭りには、中世以来一ノ宮の神輿をかついで参加しており、道路事情が悪化する最近（昭和33年）まで続いていた。この神輿については、終戦直後の昭和21年、関戸橋で外国人の車とすれちがい、外車のガラスを割ったことからピストルを向けられるという事件が起こった。この時は府中警察署長の立会で、一ノ宮が当時の金で千円支払うことで示談したというエピソードがある。また、昭和33年には多摩自然動物公園の開園式が祭礼と重なったため、その帰り車で延々と渋滞したり、祭礼も昼間行なわれるようになったこともあり、神輿の参加がなくなったとのことである。

一ノ宮の変遷

一ノ宮村は武蔵国多西郡川辺領、後多摩郡日野領徳常郷土淵庄のうちとなったが、明治に神奈川県多摩郡となり、町村合併により多摩村の大字となった。

- 宝亀 3 年(772) ・ 太政官符神祇官に小野社などに続けて奉幣を奉るよう命ずとある。
- 元慶 8 年(884) ・ 三代実録に武蔵国一ノ宮と称された記載あり。
- 延長 5 年(927) ・ 延喜式神名帳の多摩郡八座の一つに小野社の記載あり。
- 治承 5 年(1181) ・ 吾妻鏡に小山田三郎重成領が、訴訟により平太弘貞に安堵の記録あり。
- 建久年間(1190～98) ・ 畠山重忠が小野社に鳥居を寄進
- 永徳 3 年(1383) ・ 吉富郷 5 カ村 (関戸、連光寺、一ノ宮、寺方、百草) は、鎌倉公方足利氏満により鎌倉鶴岡八幡宮に寄進
- 室町時代 ・ 関東管領上杉氏の支配
- 天文 7 年(1538) ・ 小田原北条氏の支配
- 天正18年(1590) ・ 徳川氏領
- 文禄 3 年(1594) ・ 一ノ宮村の検地が行なわれる。この頃桑島万機、中山助六郎両氏の所領
- 元禄10年(1697) ・ 徳川幕府領は曾我七兵衛知行地
- 延享 3 年(1746) ・ 連光寺地内に入会地ができ、当村の飛び地となる。
- 明治元年(1868) ・ 品川県に属す。
- 明治 4 年11月 ・ 神奈川県に属す。
- 明治11年11月 ・ 郡区町村編成により神奈川県南多摩郡に属す。
- 明治22年4月1日 ・ 町村合併により多摩村となり大字の一つとなる。
- 明治26年 4 月 1 日 ・ 三多摩は東京府に編入
- 昭和18年(1943)7月1日 ・ 東京都成立

一ノ宮の小字

まえだ
前田 (1～106番地)

前田とは、その名の通り「(集落の) 前にある田圃」という意味で、居村(小野神社のある所)の前、南側にあることからついた名であると思われる。区域は東西に細長く、以前はほとんど全てが田圃であったところで、現在当

万平の誕生

一ノ宮万平、現る!

一ノ宮万平こと、杉本万平は安永8年(1779)に一ノ宮村(現・多摩市一ノ宮)で生を受けました。万平の生家は、杉本家本家と言われており、かつての本家は一ノ宮村の真明寺(新義真言宗高幡金剛寺末)の東側に300坪程の敷地がありました。本家は、元禄年間頃まで桑嶋氏の領地の名主を務めていたと伝わりますが、はっきりとしたことはわかりません。しかし、寛永

14年(1637)の検地帳には、杉本家先祖の庄右衛門の名が見え、当時は村一番の広さの屋敷地を持っていたことがわかります。

万平が、いつから任侠の道に入ったのかも判然としませんが、一ノ宮村・寺方村・関戸村(以上、現・多摩市)から由木村・東中野村・大塚村(以上、現・八王子市)までの地域に子分を抱えていたと言われてい

多摩の任侠・一ノ宮万平は、安永8年(1779)に多摩郡一ノ宮村に誕生しました。

彼が生を受けた杉本家は、元禄年間まで桑嶋氏の領地の名主を務めていたと言われているようですが、詳しいことはわかっていません。また、彼に関する史料は決して多いとは言えません。

しかし、数少ない史料を見るだけでも、彼が任侠として生きた姿が浮かび上がってきます。それは金貸しあり、脇差の携行あり、博打ありと、我々がイメージするアウトローとしての存在です。

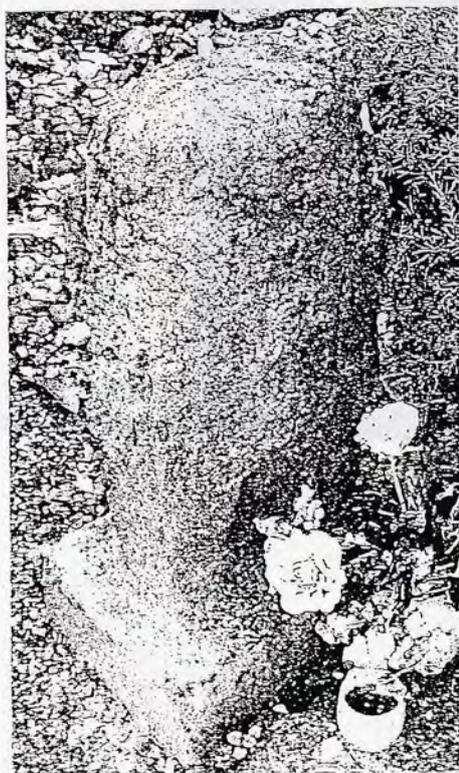
ここでは、地域の史料を中心に、全盛期の万平に注目します。

馬頭観音

小野神社の近くに、万平が安政3年(1856)4月に建立したと言われる馬頭観音があります。この石仏は死んだ馬を供養するために建てたものと伝わり、現在でも杉本家本家の方が普段から草取りなどをし

て代々守り続けています。

杉本家の先祖は、農業とともに博勞(牛馬の売買をする人)をしていたので、馬頭観音への信仰は特に篤かったと言われています。



石仏の刻銘

【右側面】	安政三年丙辰四月吉日
【正面】	馬頭観 <small>(音九)</small>
【左側面】	杉本萬平 <small>(欠損)</small>

馬頭観音 平成22年(2010)12月撮影

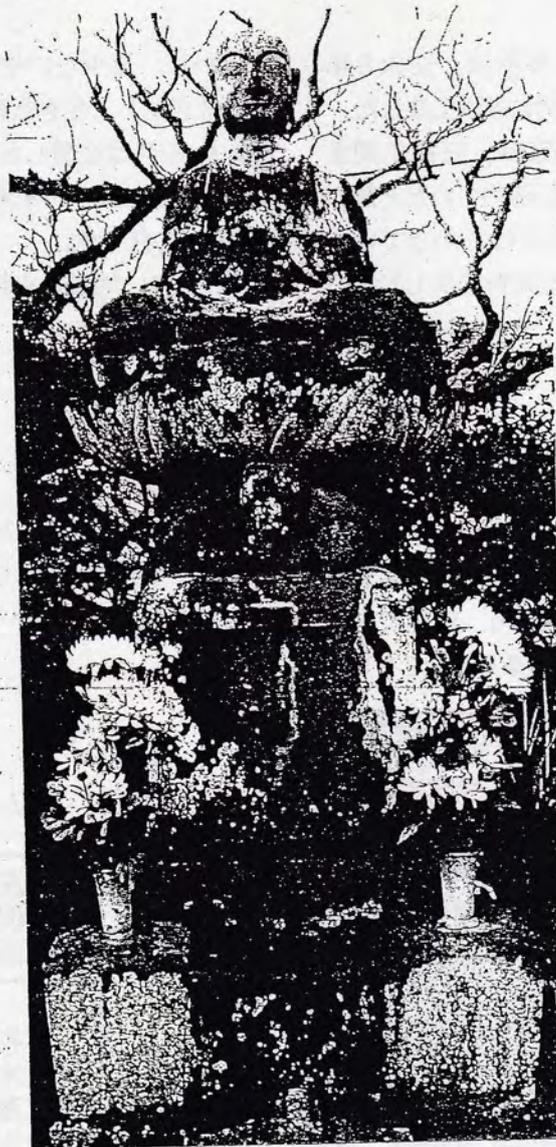
万平地蔵

安政5年(1858)4月、80歳の万平は原
一 関戸(現・多摩市東寺方)の宝泉院(真
義真言宗高幡金剛寺末)門前に地蔵、通
称「万平地蔵」を建立しました。建立につ
いては、万平があやめた人々を弔うためと
いう説や、萬霊塔であることから全ての命
を供養するためという説などがありますが、
詳しいことはわかっていません。

宝泉院の前に石仏を建てたのは、万平

の葬儀が、菩提寺の真明寺(現・多摩市
一ノ宮)が当時無住だったので、宝泉院で
行われたことが関係していると伝わります。

この地蔵の台石の側面には、寄進者と
思われる22名や相州煤ヶ谷(現・神奈川
県愛甲郡清川村煤ヶ谷)の石工の名が見
えます。このうち、熊蔵・長兵衛は、伊吹
丸の願主にも名を連ねています。



万平地蔵【正面】
平成23年(2011)2月撮影

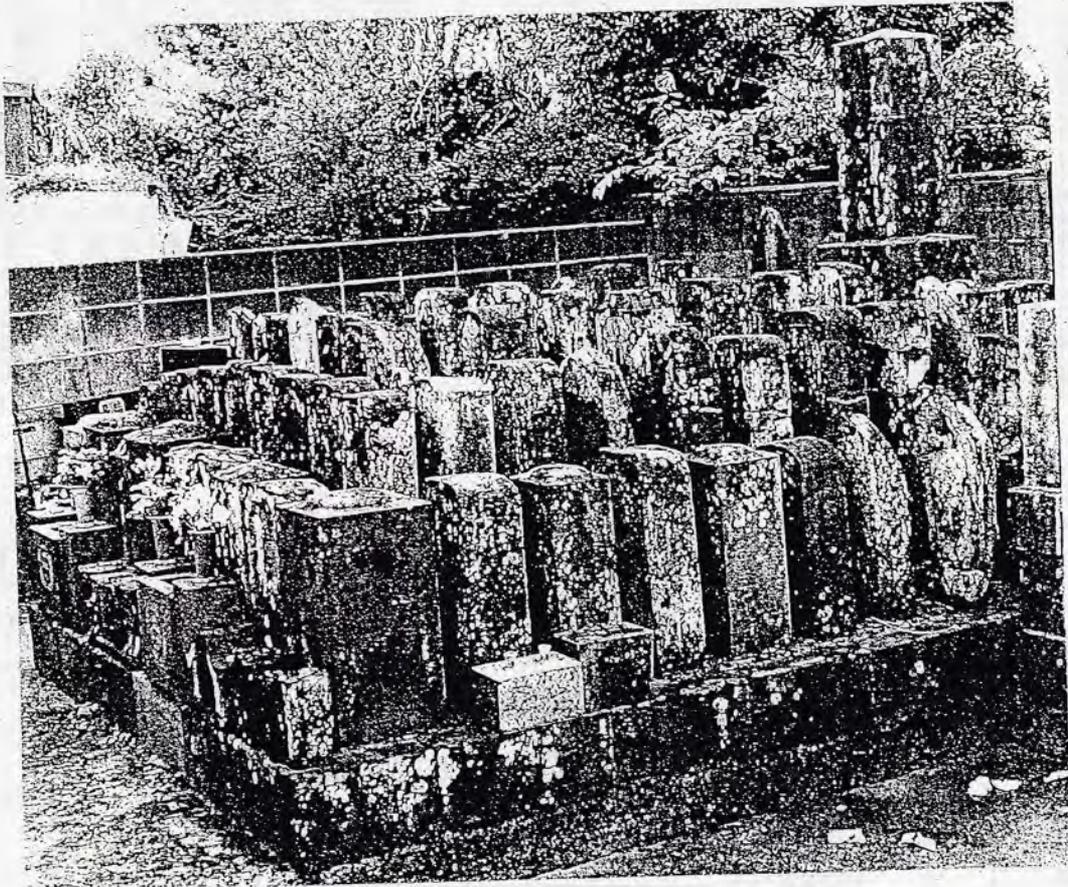
万平の墓

現在は多摩市一ノ宮の真明寺の中に建てられています。元々は寺院から南に5～6メートル離れた墓地にあり、昭和40年代に移されました。

この墓は身内衆が寄進したもので、万平の三十三回忌で亡くなった月日にあたる明治29年(1896)6月10日に建立されました。墓石の正面には、「杉本萬平」と刻まれ、その隣には2代目を継いだ大塚(現・八王子市)の井上勘五郎と、万平の子分にあ

たる東中野(現・八王子市)の堀口才治郎の名を見ることができます。

左側面には寄進者の名が見え、その内、梅五郎は杉本姓を名乗る人物で、万平地蔵の台座にも名があり、梅五郎の跡継ぎの藤三郎の名も見えます。長兵衛は伊吹丸の願主と万平地蔵の台石にも、その名があります。政大は万平の子分で、後に小金井小次郎の子分となる人物です。



万平の墓【全景】平成23年(2011)2月撮影

万平の墓の前にある無縁仏は子分のもという伝承や、任侠の人が博打のお守りとして万平の墓石をかき、持ち歩いていったという伝承が地域には残っている。

六地蔵

六地蔵とは、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)のそれぞれにあって衆生の苦しみを救う6体の地蔵のことを言います。安政7年(1860)2月、万平は寺方村(現・多摩市東寺方)の寿徳寺(曹洞宗大泉寺末)に六地蔵を奉納しました。

万平が六地蔵を寄進した理由はわかりませんが、万平が寄進したことは地蔵の刻銘や寿徳寺の校割簿(寺院の所有する種々の器財や資財をまとめた帳面)から知ることができます。



六地蔵 平成21年(2009)11月撮影/御厨利昭氏(石仏調査会)提供
数珠・宝珠・錫杖・權を持つ地藏や、合掌をする地藏の姿が見てとれる。

一ノ宮万平の関連年表

和暦	西暦	事項	その他
安永8年	1779	一ノ宮村(現・多摩市)で出生	
天明7年	1787		6月、寛政の改革が始まる(～寛政5年)
寛政6年	1794		百姓より「取締役」を選び、長脇差を帯した物を取締る
寛政10年	1798		「通り者」の取締り令を發布
文化2年	1805		6月、勘定奉行の下に関東取締出役を設置
文化12年	1815	10月5日、万平父死去	
文政4年	1821	5月20日、万平妻死去	8月、日野領を中心に編成された一ノ宮村他21か村は、浪人などの取締組合を結成する
文政7年	1824	1月、百草村(現・日野市)の百姓に借金返済の筋違いの件で訴えられる(その後は内済)	
文政9年	1826	賭場争いの件で、万平が捕まえられる(その後は不明)	9月、長脇差禁止令が發布
文政10年以前	1827	万平が願主となり、一宮大明神社で奉納角力を催す	
文政10年	1827	11月以前、博奕をし中追放となる。その後、甲州上野原や相州長後村で度々筒賽博奕をし重追放となる(その後は不明)	関東に改革組合村(寄場組合村)を設置し、無宿者の取締りを強化
天保4年	1833		天保の大飢饉(～天保10年)
天保11年	1840		3月25日、小金井小次郎が「二塚の喧嘩」を起こす
天保12年	1841		天保の改革が始まる(～天保14年)
弘化元年	1844	11月15日、河原(場所不明)で博奕が行われた時の貸元の一人として名を連ねている	
嘉永4年	1851	11月1日、子分の堀口才治郎、死去	
嘉永6年	1853		6月3日、ペリー提督が率いる黒船4艘、相模国城ヶ島の沖合に現れる
安政元年	1854		3月3日、日米和親条約を締結・調印、下田・函館2港を開く
安政3年	1856	4月、一ノ宮小字後田に馬頭観音を建立する	
安政5年	1858	4月、宝泉院(現・多摩市東寺方)門前に地藏(通称:万平地蔵)を建立する	6月19日、日米修好通商条約を調印
安政6年	1859	2月、高野長高に制作を依頼した「伊吹丸」が完成する	
安政6年	1859	5月8日以前、万平らが願主となり、六所宮(現・大國魂神社)に「伊吹丸」を奉納する	
安政7年	1860	2月、壽徳寺観音堂(現・多摩市東寺方)参道入口に六地藏を建立する	3月3日、桜田門外の変
文久3年	1863	6月11日、死去。その後、真明寺(現・多摩市一ノ宮)近くの墓地に埋葬される	7月2日、薩英戦争が勃発
慶応2年	1866	8月27日、2代目を継いだ大塚村(現・八王子市)の井上勘五郎、死去	
慶応3年	1867		11月9日、大政奉還を上表
慶応4年	1868		1月3日、鳥羽伏見の戦い。同年に関東取締出役が廃止
明治22年	1889	9月20日、万平が登場する『熱海土産温泉利書』が出版	4月1日、町村制施行により、多摩村が成立
明治26年	1893	2月12日、伊野亀吉は「三供の墓」を建立し、万平の名を刻む	三多摩が神奈川県から東京府に編入
明治29年	1896	6月10日、万平の身内衆が万平の三十三回忌に墓を建立する	
明治32年	1899	7月18日、3代目を継いだ子安村(現・八王子市)の伊野亀吉、死去	

関東とその近隣の主要な侍

